学習時の検索が幼児における学習の転移に及ぼす効果 (2)

1 週間後の検討

○堀田千絵¹・多鹿秀継²

(1 関西福祉科学大学・2 神戸親和女子大学)

キーワード: 検索、幼児、学習の転移

Effects of retrieval during learning on the transfer of learning in preschool children (2)

Chie HOTTA² and Hidetsugu TAJIKA¹(²Kansai Univ. of Welfare Science, ¹Kobe Shinwa Women's Univ)

Key Words: Retrieval, preschool children, and the transfer of learning

目 的

著者らはこれまで幼児に負担を与えず、記憶保持を高めるための方略として、成人の研究においてその有効性が確かめられている検索による学習を取り入れ、転移に与える影響についても検討してきた(関連研究として、多鹿・堀田, 2017)。

多鹿・堀田(2017)に述べたように、検索による学習は、当該内容の長期保持に効果を有するだけではなく、学習内容の動機付けやメタ認知、また本研究が着目する転移を促す二次的で間接的な効果が得られるということもわかってきた。しかし、検索による学習が幼児における学習の転移を促進するかどうかは、検討が不十分である。これまでの著者らの研究も実験参加児の数が少なく明確な回答を提示できていない。また、何が転移の対象となるかについても重要な検討課題である。そこで本研究は、実験参加児のデータを増やし、多鹿・堀田(2017)を発展させ、課題を変更し、検索が転移に及ぼす影響について検討する。

方 法

実験参加児 多鹿・堀田(2017)と同様であり、4歳児、5歳児、6歳児を含む35名であり、18名が検索群、17名が学習(物語聴取)群であり年齢はマッチさせた。生活月齢は、52~81か月であった。先天性疾患の特定の診断を有す幼児は対象から除外した。

実験計画 2×3の混合要因計画によって実施した。第1要因は習得群であり、検索、学習群であった。第2要因はテストタイプ条件であり、事前、事後、転移テストであった。第1要因は参加者間計画、第2要因は参加者内計画であった。

材料と手続き

学習課題について、多鹿・堀田(2017)を変更した。(1)初回

学習: 実験者は幼児とコミュニケーションを十分に図った後、対象幼児すべてに対し、クイズごとこと称し、例えば海の場合での捕食関係にある動植物4項目について(e.g., もしプランクトンがばい菌にやっつけられてしまったら、クジラはどうなってしまうかな? 同じかな? 減るかな? それとも増えるかな?), その正答数をチェックした。(2)検索/学習(物語聴取): 両教示群ともに習得時間を2分とし、(1)とは異なる学習材料を用意した。なお、1回目の学習については物語と回答を教えた。その後、反復検索群には食物連鎖の崩壊について一度正答を教えた後、3回検索を繰り返した。学習群は、食物連鎖の崩壊(回答)について3回教えた。(3)テスト: すべての幼児に対して、1週間後に転移テスト、(1)の事前テスト、(2)の事後テストを実施した。

結果と考察

Fig. 1に、群及びテストタイプにおける平均正答数を示した。幼児が回答できた項目数を従属変数とし、2(群)×3(テストタイプ)の分散分析(ANOVA)を実施したところ、学習条件($p < .01$)、テストタイプ($p < .001$)の主効果が有意であった。また、学習×保持($p < .01$)の交互作用が有意であった。以上の結果を詳述すると、全体として検索の方が学習群より成績が高く、事後テスト、転移テスト、事前テストの順で成績が低下した。また、事前テストでは両学習群に差はないが、事後テスト及び転移テストにおいて、反復検索の方が反復学習よりも全体的成績が高かった。

本研究の結果から、データ数を増やして検討したところ、検索による学習のメリットは、事後、転移テストともに確認できた。多鹿・堀田(2017)とは違い、難易度の高い課題の方が検索による学習の影響を強く受ける可能性もあることがわかった。

Fig.2 群及びテストタイプにおける平均正答数